シンポジウム全体へのコメント

ホルヘ・ドゥラン

三つのテーマについてコメントしたい。

第一は「国境」について。「国境」は最近できた概念だが、多様な角度から捉え直していくべきものである。たとえばアフリカは恣意的に作られた国境の典型例であり、さらに多くの問題を引き起こす危険性を秘めている。それに対し、EU＝は国境が相対化された例と言えるだろう。50 年前までは互いに憎しみあっていた国々が、国境を越えて、多様な意味で移動が自由になったことで、融和が成功した事例である。また、ラテンアメリカ（とくに南米）も国境が相対化された事例である。。ビザ・パスポートなしに南米大陸を移動することができるようになった。中米もそういう取り組みがはじまっているが、残念ながらメキシコは、「隣国」が問題で、そういった取り組みはなされていない。

第二は、「国籍」である。現在では、たくさんの国籍をもつことが有利になってきている。一つのナショナリティを獲得するのに、もともと自分が持っている国籍を申請しなくてもよいという状況があって、これは新しい動きだといえる。一方で、一人の人間が多くの国籍をもつことができるようになると、世界の仕組み自体が根本的に変わってくる。たとえば日系ブラジル人が日本国籍を再獲得するとなると、日本の国籍が持つ意味は変わってくるだろうし、世界的に、国籍がもつ意味が根本的に変わってきてしまう。

第三は、「文化」である。文化的統合の成功例としてラテンアメリカをあげたい。ラテンアメリカは、世界各地からの移民を受け入れてきた地域であるとともに、多様なバックグラウンドを持つ人々が、多文化を一つの文化に統合することに成功した事例だと思う。ラテンアメリカでは、異なる言語・文化を統合していくための国家レベルのプログラムは、これまで存在しなかった。それにもかかわらず、なぜこのような統合が達成できたかといえば、「社会」が人々を統合する主体となることに成功しているという理由がある。もちろん、ラテンアメリカが「楽園だ」ということが言いたい訳ではない。実際、ラテンアメリカでは、先住民やアフリカ系住民に対する差別の問題は解決していないという側面もある。

シンポジウム初日の特別セッションでは、外国人学生を数多く受け入れているという大分県の立命館アジア太平洋大学の話題がでたが、そこでは、留学生らは日本社会への統合プログラムを受けていないにもかかわらず、日本社会のなかで生活し、日本人学生とコミュニケーションをとっているうちに、4、5 年経てば日本語をじゅうぶんに話すことができるようになっている、という事例を聞いた。こうした事例から自分が言いたいのは、学校で子供たちに対する支援を行うさいには、その子どもに対する支援を行うのではなく、外国人をサポートするように、マジョリティの側の子たちに働きかけることが必要であるということ。さもないと、外国人の子どもが、マイノリティーとして固定化されてしまう。